によれば週一回医学部に出講していた。

ダン医師が関係していたオークランドのペラルタ、プロビデンス、サムエル・メリットの各病院は、現地に行って見ると隣接してほとんど一箇所にあり、またバークリーのアルタ・ベイツ病院もすぐ近くであった。デムリング夫人の証言では開業医生活が主で、病院での診察は早朝に行っていた。

死去の際のフレズノへの旅行の理由について二説あったが、友人に誘われてローズボールゲームを見に行く途中であったことが判明した。

演者は次女のシルバー夫人の教示で、ダン医師の墓がバークリーに隣接するエルセリート市サンセットモズレムにあることを知り、その墓に詣でることが出来た。

前秘書デムリン夫人の証言では、ダン医師は決して冷徹な科学者型の医師でなく、患者の人格を重んずる優れた臨床家であったらしい。魯迅との間で問題となった病状あるいは病名告知の問題についても、充分慎重な人柄であったという。

（福井県立短期大学第一看護学科）

ドイツ第三帝国下における精神分析学の動向について

小俣和一郎

第二次世界大戦終結後すでに四〇年余を経た今日、大戦にまつわる数多くの歴史的事実は世代の交替が進む中で次第に忘れ去られつつある。このことは精神医学と精神科医療とが往時において遭遇した未曽有の歴史的危機に関してもまた同様であろう。精神科医の世代交替もまた国際的な現象であって、ひとりわが国だけの事情では決してない。しかしながら精神科医療の歴史上最も悲惨な時代をつくり出したドイツ（西ドイツ）においては、一九八三年（ヒトラーの政権獲得後満五十年）を境目に数多くの第三帝国関係の出版物が刊行され、過去の歴史に関する省察の気運が生まれつつあるようにみえる。精神医学関係の書籍についても同様で、教科書の中にヒトラー時代の精神医学史を組み入れたもの、第三帝国下の精神分析学の歴史についての単行

本、当時の精神医学の歴史的背景に関する論文などが近年にわかにその数を増しつつある。このような一種のブームは、ドイツ人自らの目による自らの歴史への極力公平な立場からの再反省ともうけとれ、その意味では戦後まもなく各国からこぞって刊行された被抑圧者（主にユダヤ人）の手による暴露的な性格を兼ねた報告とも、また強制収容所からの解放者に関する純粋に精神医学的な研究のたてつづけの公表とも異っている。歴史をあるがままにとらえ、それを自らの歴史として保存し、次代へと手渡してゆくことは決して簡単なことではなかろう。

今回はこうした精神医学史の中の最も暗く悲惨な一幕の中から、第三帝国下における精神分析学の動向についてとりあげ、精神医学の歴史に関する反省の一資料として考察してみたい。精神分析学は周知のようにその成立が主としてユダヤ人学者の手によっていたという理由からばかりではなく、精神分析そのものが単なる神経症の治療にとどまらず広く教育、哲学、政治、芸術などの諸分野にまたがる一つの思想運動であったことから、ナチ体制下においては他のどの精神医学の領域よりも一層の抑圧と変形とを被っている。しかしながら一方では精神分析学者のドイツ国内における唯一の合法団体として認められたドイツ精神分析協会（Deutsche Psychoanalytische Gesellschaft, DPG）が多くの犠牲と譲歩とによって細々と生き残り、ついには形骸化したものの戦後のドイツ精神分析学の復興にとって重要な役割を果たしたことも指摘されねばならないであろう。いずれにせよドイツ国内における精神分析学の弾圧によって、今日でも西ドイツは精神療法的精神医学の発達と普及が西側先進国の中では最も立ち遅れた国の一つとなってしまった。このような反省から、近年西ドイツにおいては数多くの精神療法を主たる治療目的とする専門の医療機関が次々に生まれつつあるが、精神医学が他の医学分野とは異って、多様なイデオロギーをその内に含む学問分野である以上、その歴史を考察する場合には常に反省的視点を用意しつつのぞむ必要があろう。

（医療法人・大富士病院）